

西洋古典学

◇教員◇

教授：葛西康德

助教：吉田俊一郎

◇学生◇

学部：5名、修士課程：6名、博士課程：7名

(1) 西洋古典学は誰のための学問か？

最近、大学以外の場所で古典語（ギリシア語・ラテン語）を勉強する人々が増えていると聞いている。退職した大量のベビーブーム世代の知的好奇心が古典古代に向かっていることのあらわれかもしれない。一方、大学で古典語を学ぶ機会が増えているという話は聞いたことがない。西洋古典学という学問は、所詮、時間とお金に余裕ある人々のための学問なのであろうか？

西洋に滞在している日本人が、「あなたは何を勉強しています(した)か？」という質問に対して、(滅多にないと思うが)「西洋古典学(Classics)です。」と答えると、相手は一瞬驚くが、そのあとは説明の必要はない。相手が西洋古典学を専攻しているか、あるいはしたことがある場合は、「何を讀んだか？」とか、「どの作家が好きか？」とか、話が弾む。相手との間に信頼関係とまではいなくても、一種の共通理解が生まれている。相手が学者や学生でなく、いわゆる社会人（ビジネスマン）でも同様な会話が交わされるであろう。もちろん、西洋においても現代は西洋古典学を学ぶ学生は激減し、コンピュータ・サイエンスなどがそれにとって代わっているから、このような確率は低い。但し、北米では、古典学専攻者数は必ずしも減少していない。

他方、日本において就職活動（面接）の中で、同様の質問に対して同様の答えをすると、相手（面接担当者）は驚き、重ねて質問をしてくる。「それはどんな学問ですか？」と。そして、生真面目な学生は「ギリシア語・ラテン語のテキストを原文で読み、最終的にはテキストを校訂することを

目指す学問です。」と答える。この答えに対して、大抵の場合、相手（面接者）は「それならば大学に残って勉強を続けた方がいいのではないですか。」と言い、「お帰りはあちら。」ということになる。西洋古典学は、（西洋古典学）研究者のための学問なのであろうか。

確かに、人文学は、一般的に言って、職業選択に直結したものではない。とはいえ、退職者と研究者のためだけの学問というのは、あまりに極端であり、不健康な状態と言わざるを得ない。もちろん、実際には西洋古典学以外の分野を専攻する学生も西洋古典学を勉強する。この場合の西洋古典学は、それぞれの（専門）分野でギリシア語とラテン語で書かれた文献（例えば、英文学、仏文学、独文学はじめ、哲学、歴史学、法学など）を読むための準備、ないし道具としての学問ということになる。

では、「普通の職業」（ビジネスマン、公務員など）に就く学生には西洋古典学は無縁の学問なのであろうか。先述の就職担当者の無知・無教養を笑うのはたやすい。しかし、西洋古典学が「普通の職業」に就く学生のための「普通」の学問であることを、西洋古典学者はこれまで正面から説明してきたであろうか？実際には日本の西洋古典学がギリシア語およびラテン語の文法的入門的教育とならんで従事してきたのは、古典作品、とくに古典「文学」作品の翻訳であった。これによって、西洋古典学は他分野の研究者および「教養ある」社会人の生産に貢献してきたのである。しかし、だからといって、「西洋古典学はだれのための学問か」という質問に対して正面から答えたことにはならない。

西洋古典学は「西洋」古典学である。西洋で生まれ、西洋で発展してきた学問である。では、西洋ではなぜ古典学を研究・教育したのか、なぜそれが発展したかと問うならば、それを習得した人間が社会で活躍したからに他ならない。当たり前のことだが、教会の聖職者は聖書を読むために、（ラテン語は当然）ギリシア語・ヘブライ語を学んでいた。一方、ローマ法のトレーニングで鍛えられた者が、法律家となり国王官僚や裁判官として世俗世界を支配した。さらに、特に 19 世紀英国では、西洋古典学を習得したものが、植民地官僚として海を渡った。もちろん、大学における古典教育の前段階として、中等教育における古典語の教師が大量に必要とされたことは言うまでもない。

20 世紀における二度の世界大戦を経て、西洋古典学をめぐる学問と社会のこのような相互関係は大きくゆらいだ。西洋古典学に限ったことではな

いかかもしれないが、いわゆる「人文学の危機」が叫ばれて久しい。しかし、この学問はしぶとく生き残っている。それは何故か。

二つの側面から、その理由を説明できるように思われる。一方では、西洋古典学は、既成のあるいは確立したテキストの「主観的」な解釈によって勝負のつく学問ではなく、誤解を恐れず言えば、一種の客観性をもった諸手続きを踏まえた「学問」ないし「科学」であるからである。新しい資料（特に、パピルスと碑文資料）の発見がある。進歩もあれば退歩もある。自然科学と同じだとすら言ってもよい。実際、合衆国の学士課程教育では、「西洋古典学」と「数学」をダブル・メジャーにしている学生もめずらしくない。

他方では、上記の説明と矛盾する印象を与えるが、この学問を学ぶ中でしごかれるのは、限られたテキストないし限られた解釈可能性の中から、なんとか「より納得のゆく」解釈を発見することである。このトレーニングこそ、社会に出てから、限られた時間と資源の中で、「より妥当な問題解決」を発見することに役立つのである。誤解を恐れず言えば、西洋古典学はきわめて「実用的・実践的」な学問である。

歴史的・文化的・宗教的伝統を異にする我国に西洋古典学が伝播したとき、欧米のような「普通」の学生が学ぶことはほとんどなく、西洋古典学は専ら研究者志望の学生のための語学教育として機能した。とはいえ、「翻訳」を通じて古典文学作品は大いに普及し、日本型「教養教育」の一翼をなし、また演劇も日本語で上演された。

本研究室は、この学問がもつ上記のような「生態」と「磁力」に知的好奇心を魅了された学生が二年間しっかり学部で勉強し、卒業後は社会に出て種々の部面で活躍する、そのような研究室たらんことを目指している。

もちろん、大学卒業後も引き続いてこの学問を勉強したいと思う人には、よろこんで個人的にアドバイスをしたい。

（2）西洋古典学研究室の「学士課程」教育

ギリシア人・ローマ人とはどのような人間であり、彼らの作る社会や国家とはどのようなものであったか、ということを経典作品の読解を通じて理解する。そして、このようにして得られた人間と社会を理解する「基本枠組」と「基本概念」を用いて、現代社会（国内・国際）を理解し、相互比較を試みる。これが、2年間の「学士課程」教育の目的である。こうし

て創られた人材は、内外を問わず社会の「あらゆる」部門で能力を発揮する。

西洋古典の世界に興味をもつ学生は、大別して、古典作品の内容に惹かれる場合と、ギリシア語・ラテン語自体（その規則的な活用やリズム、あるいは文法構造の解読（「因数分解」）など）に惹かれる場合がある。前者の場合、翻訳を読んで興味を深めていって差支えないが、翻訳だけというわけにはいかない。実際、翻訳を読めば読むほど、ギリシア語・ラテン語自体に関心を持つようになる。そして、いかなる学問においても最も重要なものは基礎トレーニングである。

ただ、本郷に進学する前に初等文法を勉強していなくても心配する必要はない。むしろ、駒場では西洋古典と（一見）関係ないことをやってきてほしい。そして本郷にきたら、「文学部の外国語科目」として両言語の入門授業を開講しているので、必ず出席せよ。司法試験の勉強と同じで、「宅浪」ではものにならないばかりか、悪い癖がつく。最初は専修課程の他の授業についていくのは大変だと思われるが、夏休みにがんばれば、3年生の後期からは授業についていけるようになるので、焦らず、着実に授業に出席してほしい。「宅浪」はいけない。

学問は「一人でするもの」と言う大学の先生は多いが、少なくとも学士課程に関しては、筆者はそうは思わない。人は競争（他人にまけたくない）によって学ぶ。西洋古典学専攻の学生は多くはないが、多くはないからこそ「力をあわせて競争して」ほしい。

専修課程の授業は、講義と演習に大別される。日本の文学部教育は演習を重視する。従って、必修である。大学院との合併授業であるので、最初はついてゆくのが大変だが、くじけないでほしい。非常勤講師の大芝芳弘先生には毎年ラテン文学を、佐野好則先生にはギリシア文学を担当していただいている。他方、講義の方も軽視してはならない。文法的な事項の正確な理解と同様に、ギリシア・ローマ社会の全体的理解は古典文学作品の解釈にとって不可欠である。特に、本研究室では宗教と法の理解に力をそそいでいる。我々の先入見を安易に作品解釈に持ち込んで서는ならない。非キリスト教という点で日本と古典古代は共通だからこそ、我々のナイーブな宗教観がいとまたやすく流入するのである。また、西洋古典学専修課程は、古代哲学と西洋古代史の授業を選択必修としているので、こちらもあわせて履修していただきたい。

また、「アカデミック・ライティング」の授業も開講しているので、がんばって英語でレポートや論文を書く訓練をしていただきたい。西洋古典学は英語で論文を書くのに向いた学問である。これらの機会を通じて、いやでも英語力は向上する。

(3) 「トビタテ」

① TOPS

本家（西洋）における西洋古典学の雰囲気味わうため、古典学の世界センターであるオクスフォード大学で、コレッジに滞在して、2012年度以来、毎夏4週間「TOPS=Tokyo Oxford Programme of Summer」を開催している。最高の図書館で、斯界の「トップ」と机を並べて勉強するという醍醐味、若きフェローたちの授業を直接受ける醍醐味は、日本ではこのプログラム以外では味わえない。またこのプログラムにはイギリス法（コモン・ロー）の授業も組み込まれている。「なぜ法律の勉強をしなければならないのか？」と不思議に思われるであろう。もちろん、ビジネスの世界におけるグローバル・スタンダードとしてのコモン・ローを学ぶことは社会に出てから役立つ、という実用的理由もある。しかし、決してそれだけではない。コモン・ローの中核部分である判例の「書かれたナラティブ」、そして、裁判傍聴で聞くバリスタ（法廷弁護士）の「オーラルなナラティブ」、これらに諸君は間違いなく魅了される。これは古典文学が社会に対してもっている「パフォーマンス性」に通じるのである。自分には関係ないと思わず、この授業も受けてほしい。お金はかかるが、何としても参加してほしい。1か月のオクスフォード生活は必ず諸君の人生を左右する衝撃を与えるはずである。もちろん、大学院学生にとっては、TOPSは将来の留学の準備となる。尚、TOPSは「体験活動」プログラムの一つなので、大学本部から学部学生に補助が与えられる。

② クラシカル・セミナー

「クラシカル・セミナー」と称する研究会を1年に8回くらい開催している。このセミナーは、本来、学生および院生が（スピーカーの選定を含めて）自主的に運営してほしいと願っている。卒業論文、修士論文、博士論文の発表の場であるだけでなく、報告者の中には、国内はもとより海外の研究者が必ず何名か含まれている。

③ キャリア・セミナー

就職に関して、研究室主催で「キャリア・セミナー」を開催し、多方面から講師にアドバイスをいただいている。公務員、大学関係者、外交官、ビジネスマン、法律家など、講師は社会の第一線で活躍されている。この方たちはみなさん西洋古典に関心を持ち、その重要性を理解している。西洋古典学研究室の応援団である。